

ナラティブレビューの概要：考え方，書き方，評価ツール

堀越 香* 岡 美智代**

*群馬大学大学院保健学研究科博士後期課程 **群馬大学大学院保健学研究科

Overview of Narrative Review: Philosophy, Writing and Assessment Scale

Kaori Horikoshi* Michiyo Oka**

* Gunma University, Graduate School of Health Sciences, Doctoral Program

** Gunma University, Graduate School of Health Sciences

キーワード：

ナラティブレビュー

narrative review

システマティックレビュー

systematic review

文献レビュー

literature review

オーバービュー論文

overview article

SANRA

the scale for the assessment of narrative review articles

I. はじめに

科学的な研究のひとつに文献レビュー (Literature review) がある。文献レビューは個々の研究論文などを収集・精読・検討し、それらの研究結果をまとめるものである。文献レビューには14種類が見い出されている¹⁾が、よく対比される文献レビューとして、システマティックレビュー (SR: Systematic Review) とナラティブレビュー (NR: Narrative Review) がある²⁾。SRは、類似する個々の研究論文を一定の評価基準で体系的に検索・収集して評価を行う研究である。また、SRには、個々の研究結果を統合するために統計的処理がなされるメタアナリシスを行うこともある。SRとメタアナリシスは、厳密に規定された基準で体系的にまとめていくため、時間と手間がかかる高度なレビューである。一方、NRは、一定の評価基準はなく、特定のトピックに関する類似する研究論文を著者の考えである程度自由に研究結果をまとめることができるレビューである (表1)。

近年、SRやメタアナリシスの研究は増加してい

るが、NRも依然として人気がある文献レビューの方法である⁴⁾。NRは、SRのように体系的ではないため、その方法についてあまり説明がされていない。そこで、本稿では、NRの考え方やレビューの書き方を紹介する。

II. ナラティブレビューとは

NRは、レビューの手続きが厳格に規定されているSRやメタアナリシスが開発される以前から行われてきた伝統的な文献レビュー (literature review) の方法である。NRには、エディトリアル (editorial)、コメンタリー (commentary)、オーバービュー論文 (overview article) の3つのタイプがある⁵⁾ (表2)。

研究論文としてのNRは、オーバービュー論文にあたる。オーバービュー論文のNRは、教科書よりも最新の情報を得るための教育的論文として用いられ、患者のマネジメントや研究デザインに関する多くの洞察を得たり、レビューした文献に基づく客観的な結論ではなく、様々な対象文献に基づく意見重視の議論を提示するのに用いられてきた⁵⁾。

表1 レビュー論文の種類

筆者注：この表は、UHN³⁾による内容を筆者らが和訳し、一部改変した

種類	システマティックレビュー&メタアナリシス	ナラティブレビュー
概要	レビューの実施に関するガイドラインに遵守しながら、リサーチエビデンスを体系的に検索、評価、統合する。 量的研究の結果を統計的に組み合わせて、結果のより正確な効果を提供する手法を使用する。	特定のトピックに関する研究論文の結果を包括的に要約する
ガイドライン	・ Institute of Medicine(IOM) ・ Agency for Healthcare Research and Quality (AHRQ) ・ Cochrane ・ Center for Reviews and Dissemination(CRD) ・ Preferred Reporting Items for Systematic Reviews and Meta-Analyses(PRISMA) 等	なし
期間	12ヶ月以上 検索期間：以下に依拠して4～6週間以上 ・ データベースの数 ・ 複雑性 ・ 様々な検索方法を使用	著者に依拠
リソース	・ 研究課題に適切なデータベースへのアクセス ・ 文献管理ソフトウェア ・ スクリーニングソフトウェア/フォーム ・ データ抽出ソフトウェア/フォーム ・ 統計ソフトウェア ・ チームがファイルを共有/管理するための方法/場所	著者に依拠
チーム	2人以上でスクリーニング	1人（決まりはない）

表2 Narrative Review の3つのタイプ

筆者注：Green ら⁵⁾の説明文を筆者らが和訳した

NRのタイプ	概要
エディトリアル Editorial	ジャーナルの編集者または招待されたゲストの著者が読者のために特定のトピックに関する情報を検索し統合して論説的に書かれるもので、厳選され、焦点を絞った数本の文献による短いレビュー
コメンタリー Commentary	著者の専門知識によって特定の意見を表明するために書かれる論評としてのレビューで、一般の研究論文よりも短いもの
オーバービュー論文 Overview article	非システマティック・ナラティブレビュー（unsystematic narrative review）ともいわれ、過去に発表された文献を包括的にナラティブにまとめられ、著者の知見を凝縮したかたちで報告し、各文献の内容を要約するのが一般的である

他方、SR はこれまで、介入や治療の有効性を検証する目的で詳細かつ厳密で明確な方法を重視した

レビューとして開発され発展してきた⁶⁾。しかし、SR やメタアナリシスを実施しにくいときには、NR

は引き続き価値のある方法である。例えば、SRの体系的な評価基準では除外されてしまうような、バラバラの指標によって評価された研究論文に対してNRを行うことで、トピックに関する幅広い視点から新たな発見や洞察を得ることができるかもしれない。また、まだよく知られていないトピックを探りたいときや、すでにわかっているトピックについてより深い解釈を行ったり、トピックにおけるギャップを特定したり、新しい考え方を生み出したりするときに使用することもできる。このことからNRは、SRを補完するために役立つレビューともいえる。

Ⅲ. ナラティブレビューの進め方：書き方に焦点を当てて

先に述べた3つのタイプのNRのうち、本稿ではオーバービュー論文のNRについて概説する。NRは、SRのような体系的なアプローチが必須ではないため、報告方法、検索用語、使用したデータベース、選択基準や除外基準などの方法を提示することは必ずしも求められていない⁷⁾。研究者は、リサーチクエスト（研究課題）を導くために、自らの判断と専門知識に基づいて研究方法を選択していく。このことから、客観性に乏しく、エビデンスレベルにおいて、研究者の先入観や結論によってバイアスがかかりやすいことが指摘されている。そのため、NRにおいては必須ではないが、透明性を高めるために、自分が選択して行ったNRの研究方法をしっかりと明記することが質の高いNRにするためには重要である。例えば、文献検索時のキーワード、選択基準や除外基準などを明記することでその研究や結果の再現が可能になり、再現性が生まれる。再現性があることで、研究の信頼性や妥当性の確保につながる。また、NRにはガイドラインはないが、査読付きジャーナルに投稿するための質の高いNRを行うためには、NRを行うための方法を提示すること、適切に構造化されていること、トピックに関する対象文献のエビデンスを統合していること、そして明確なメッセージを伝えることが必要である⁵⁾。NRで強調される要素は、可能な限り客観的であること、また、NRの目的は、トピックに関す

る対象文献を記述および統合し、そのエビデンスから結論を提供することである⁵⁾。すなわち、基本的には、すべての学術論文に求められる要素と同様の形式で実施することが重要である。

以下に、Greenら⁵⁾が教示するNRの方法をもとに、筆者らの経験も交えて、NRの具体的な書き方を詳述する。

1. 準備

まずは、文献の予備調査を行う⁵⁾。文献を検索して、関心のある分野ですでにどのような研究が発表・出版されているかを確認する⁵⁾。ここでの作業はトピックと目的を絞り込むのに役立つ⁵⁾。例えば、予備調査の段階で、自分の興味のあるトピックについてのレビューがすでに発表されている場合には、少し異なるトピックを選択したり、目的の方向性を少し変更したりする⁵⁾。このような作業を繰り返すことで、トピックに関する動向を把握することができる。また、そのトピックに関するレビューがまだ掲載されていないければ、これから行うレビューの必要性を確立するのに役立つ⁵⁾。このような情報が後述する今後のNR論文執筆に役立つのである。

2. タイトルをつける

論文のタイトルは、レビュー対象のトピックを明確に説明し、タイトルのどこかに「文献レビュー」や「ナラティブレビュー」などの言葉を入れて、どのような研究デザインであるかが読者に明確に伝わるようにする⁵⁾。例えば、「腰痛と補完療法に関するナラティブレビュー」などとする。

3. アブストラクト（要旨）

アブストラクトは、論文（本文）の内容を簡潔に説明するものである。そのため、本文が完成した後に、記述する。近年は構造化されたアブストラクトが求められることが多く、主に、目的、方法、結果、結論などで構成し、さらにキーワードを記載する⁵⁾。アブストラクトが構造化された背景には、著者がアブストラクトで研究の必要な要素を適切に報告しないことが多くみられたためといわれている⁵⁾。そのため、ほとんどのジャーナルが、構造化されたアブ

ストラクト形式を採用している⁵⁾。しかし、ジャーナルによっては、ナラティブ形式のアブストラクトが求められることがあり、その場合には、これらの内容をまとめてひとつの段落でナラティブに記述する。

4. イントロダクション (序論)

研究に至った背景を通して、トピックに関連する文献をレビューし、予備的な文献検索の結果やトピックにおける分野の文献レビューには不足があることを記述し、研究の目的を明確に述べる⁵⁾。さらに、研究の必要性や重要性を主張する⁵⁾。ここでの情報は先述した準備段階での作業が活用できる。また、論文の情報を理解する上で不可欠な、これまでの論文で使用されたものとは異なる用語があれば明確に定義する^{5, 8)}。

5. メソッド (方法)

論文の方法セクションでは、研究がどのように行われたかを順序立てて説明する⁵⁾。まずはデータ収集のリソースとして、電子検索データベースを使用する。使用するデータベースは、論文の目的とトピックに応じた適切なデータベースを検索する。たとえば、健康関連分野における日本語のデータベースでは、医中誌 Web, J-Stage, CiNii, Google Scholar などがある。英語のデータベースでは、PubMed, CINAHL, Web of Science, Cochrane Library Trials, Medline, EMBASE, PsycINFO などがある。キーワード検索を行う際のデータベースの数は、80%以上のレビュー研究が3つ以上のデータベースを使用していたことが示されている⁹⁾。トピックについて適切な広さと深さを持たせるには、研究分野に適したデータベースを複数検索するとよいだろう。

検索データベースには、文献検索パラメータを活用することで合理的な検索が可能となる⁵⁾。たとえば、同義語を整理して同概念の言葉を同時に検索してくれる MeSH (Medical Subject Headings) 機能を使用してより精度の高い文献を探すことができる⁵⁾。とはいえ、関連するすべての研究を検索できるように十分に包括的である必要はあるが、少しでも関係のある論文をすべて抽出し、多大な数の論文

をレビューするのは時間と手間が繁雑になりかねない。レビューがしやすい数にある程度焦点を絞ることも重要である。このようなときは、検索範囲を制限することが得策だろう。たとえば、データベースの初年度から現在まですべて検索するのではなく、データベースのフィルター機能を使用して過去10年や5年と制限を掛けたりするなどして、検索数を絞っていく。

次に、検索した用語 (検索キーワード) や検索期間 (検索の開始年月と終了年月)、検索日、研究の種類、論文の言語、検索戦略、選択・除外基準、検索フローチャートを含める。これらの項目を報告することで、読者が方法のセクションに記述した内容に基づいた検索を再現できるのであれば⁵⁾、先に述べた透明性の確保につながるだろう。

6. 結果

文献検索で取得したすべての情報を統合して包括的な結果としてまとめる⁵⁾。分析の仕方や統合の仕方は任意であるため、著者が決める。分析結果は可能な限り明確かつ客観的に記述する⁵⁾。結果の記述の仕方に決まりはないため、どのように構成し、情報を分かりやすくまとめるかは、著者のアイデアや技量に拠る。著者はレビューの目的に応じて何を伝えようとしているのかを明確に考える必要がある。図や表を用いて整理して表示することもわかりやすくするために有用である⁵⁾。たとえば、対象とする研究分野でどのような尺度が使われているのかを分析する場合には、対象文献から尺度を抽出し、それを尺度別に分類して表にまとめたり、質的な記述を抽出してテーマとしてまとめたりすることもできるだろう。著者は常に読者を念頭に置き、読者にとって明確で臨床的に関連性があり、読みやすい統合になるように工夫する必要がある⁵⁾。

さらに、結果の内容はすべて考察する必要があるため、あまり多くの情報を結果に示し過ぎると考察をするときに繁雑になる。したがって、考察とのバランスも考えて結果をまとめる。

7. 考察

今回行った方法や結果と結び付けて考察し、その臨床的意義を示し、検討した文献から論理的な解釈を行う⁵⁾。このとき、研究対象分野の内容に関する専門知識を用いた解釈や、対象文献に対してクリティークな評価をしていく⁵⁾。また、考察をしていくなかで、研究対象トピックの専門知識を持ち、執筆経験のある信頼できる研究者に自分が行ったNR論文をレビューしてもらうこと⁵⁾や、大学生や大学院生であればゼミで発表することも有用である。これにより、自分ではわからない弱点に気づき、改善のための新たな視点が得られたり⁵⁾、客観性や信頼性にもつながる。フィードバックを受ける際には、クリティークなコメントを個人的に受け止めず、論文を改善するための方法として捉えることが重要である⁵⁾。

8. 研究の限界

研究の弱点を指摘し、改善の余地がある分野について言及する⁵⁾。完璧な論文はなく、限界が記載されていないと、主観的と捉えられやすいNRの弱点がさらに強調され⁵⁾、客観性や妥当性に対する誤解を招きやすくなる。さらに、研究の長所と短所を議論できないと、目的が焦点から外れているとも考えられる⁵⁾。

9. 結論

目的との関連性、NRから導き出された主な結論や今後の研究の方向性を示す⁵⁾。NRの主な結果については、明確で簡潔な要約を記述する⁵⁾。結論は、レビューした文献から導き出され、文献の統合によって裏付けられる必要がある⁵⁾。NRは体系的な方法ではないため、結論が弱められる可能性につながる⁵⁾。目的と無関係な結論を導き出すとレビューの焦点を見失い、バイアスが入る可能性があり、妥当性に疑いをもたれやすくなる⁵⁾。また、実践への具体的な示唆についても言及する。さらに、今後に向けた新たな研究分野や具体的な研究デザインについての提案をする。新たな研究に着手するのは、こうした提言からであることが多く、それはNRの重要な成果といえる。

10. 謝辞

NRを行うにあたり支援してくれた人に対して謝辞を述べる⁵⁾。例えば、先に述べた、NR論文をレビューしてもらい、フィードバックをしてくれた研究者やゼミ仲間、アイデアを提供してくれた人などに対してである。これは、通常の研究論文と同様である。

11. 文献

対象文献や引用文献を記載する。特にレビューするにあたって引用し、評価した対象文献を正確に示す⁵⁾。結果を表や図で示した場合の対象文献も忘れずに記載する。また、論文を書くために使用したすべての裏付けのための引用文献も記載する。

IV. ナラティブレビューの評価ツール

NRは、体系的に従うガイダンスなどがない。そのため、質の高いNRを行うためには、先に述べたように、再現性を重視し、すべての研究論文に求められる要素と同様の形式で進めることが重要である。近年、NRの質の向上に向けた品質評価ツール「The Scale for the Assessment of Narrative Review Articles (SANRA)」が開発されている¹⁰⁾。SANRAは、編集者が原稿に関する決定を下すのを支援するだけでなく、査読者や読者が論文をクリティークに評価する際や、著者がNRを書く際に質を高めることを支援するための、シンプルで簡単な品質評価手段となることを目的としている¹⁰⁾。評価項目は全6項目で、スコアとして、0（低標準）・1（中間）・2（高標準）で評価され、最大合計スコアは12である¹⁰⁾（表3）。

Google ScholarでSANRA開発論文の被引用論文を検索してみたところ、2019年の出版年の5編から、2020年の38編、2021年の151編、2022年の249編、2023年の350編へと着実に増えていることが示された（検索日2024年9月3日）。日本語の論文では3編が使用されていた。また、海外ではNRに関するトレンドとして、SANRAを全体的な品質について査読者が考慮すべき要素に関するガイダンスとして紹介されている¹¹⁾。このような評価ツールを使用することでNRのさらなる信頼性の確

表3 The Scale for the Assessment of Narrative Review Articles (SANRA) 評価項目

筆者注：Baethge ら¹⁰⁾ における SANRA の説明文を筆者らが和訳した

(1) 読者にとっての論文の重要性の正当化		
読者にとっての重要性の正当性は、各ジャーナルの読者の文脈で考慮する必要がある。原稿が臨床上の課題をどの程度うまく概説し、答えが出ていない課題やエビデンスのギャップを浮き彫りにしているかを検討する。		
	・重要性は正当化されていない	0
	・重要性は言及されているが、明確に正当化されていない	1
	・重要性は明確に正当化されている	2
(2) 具体的な目的の表明または研究課題の明示		
優れた論文では、特定の目的または研究課題が1つ以上表明され、または検討されるトピックが提案されている。		
	・目的も研究課題もない	0
	・目的は一般的だが、具体的ではなく、明確な研究課題でもない	1
	・1つ以上の具体的な目的や研究課題が設定されている	2
(3) 文献検索の記述		
説得力のあるNRでは、情報源について透明性が保たれている。ただし、2点の評価を獲得するには、SRほど詳細に(複数のデータベースを検索し、検索履歴、フローチャートなどの正確な説明を含める)文献検索を説明する必要はない。ただし、検索用語と、含まれる文献の種類を指定する必要がある。		
	・検索戦略が示されていない	0
	・文献検索について大まかに説明されている	1
	・文献検索は検索用語や包含基準も含めて詳細に記述されている	2
(4) 参考文献の表示		
論文がすべての記述を参考文献で表示されるわけではない。ただし、論文の議論に不可欠な記述(「キー ステートメント」)は、ほぼすべてのケースで参考文献によって裏付けられている必要がある。「糖尿病は世界中で慢性疾患の最も一般的な原因の1つである」など、キー ステートメントが表面的妥当性で議論の余地がない場合は、評価目的で例外を設けるのが妥当である。参考文献の表示の完全性を評価する。		
	・主要な記述が参考文献によって裏付けられていない	0
	・主要な記述の参照に一貫性がない	1
	・主要な記述は参考文献によって裏付けられている	2
(5) 科学的推論		
この項目では、科学的論点の質について説明している。説得力のあるNRでは、主要な議論の根拠を示す。研究デザイン(ランダム化比較試験、質的研究など)と、可能であればエビデンスレベルについて言及する必要がある。		
	・論文の指摘は適切な論拠に基づいていない	0
	・適切なエビデンスに選択的に導かれている	1
	・適切なエビデンスがおおむね揃っている	2
(6) データの適切な提示		
論文の議論の中心となるデータの正しい提示について説明する。どのデータが関連しているか見なされるかは、分野によって異なる。分野によっては、関連データは相対リスクではなく絶対データであったり、臨床エンドポイント、代替エンドポイント、中間エンドポイントであったりする。これらの結果は正しく提示されなければならない。たとえば、効果サイズには信頼区間が伴うのが適切である。論文がこれをどの程度達成しているかを評価する。		
	・データが十分に提示されていない	0
	・データは最適な方法で表示されていないことがある	1
	・関連するアウトカムデータはおおむね適切に提示されている	2

保につながるだろう。

V. おわりに

文献レビューは、大学生や大学院生といった研究

をはじめたばかりの初学者にとって、また、新たなテーマで研究に踏み出そうとする研究者にとっても、研究の第1歩を踏みだす最適な研究である。それは、介入研究や調査研究、インタビュー研究など

どんな研究でも自分の研究テーマを探したり、把握する上で文献レビューは導入的役割をもっているからである。そのなかでNRは1人で行うこともでき、ルールに縛れない柔軟性があり、かつ本格的な研究として多くの示唆を与えてくれるものである。

本稿では、日本語であまり説明がされていないNRの考え方や、書き方を通してNRの進め方を紹介した。SRのように体系的なアプローチではないが、NRはSRの補完的な役割をもつレビュー方法である。NRを実施する際は、再現性を念頭に置き、SANRAなど評価ツールを活用し、すべての研究論文に求められる要素と同様の形式で進めることが重要である。

利益相反：本論文に関して、開示すべき利益相反はない。

文献

- 1) Grant MJ, Booth A. A typology of reviews: an analysis of 14 review types and associated methodologies. *Health Info Libr J*. 26: 91-108, 2009
- 2) Gregory AT, Denniss AR.: An Introduction to Writing Narrative and Systematic Reviews - Tasks, Tips and Traps for Aspiring Authors. *Heart, Lung and Circulation*. 27: 893-898, 2018
- 3) University Health Network (UHN), Library and Information Services. Types of Literature Reviews, <https://guides.hsict.library.utoronto.ca/c.php?g=696870&p=5020041>. (2025年1月23日検索)
- 4) Haddaway NR, Woodcock P, Macura B, Collins A.: Making literature reviews more reliable through application of lessons from systematic reviews. *Conserv Biol*. 29: 1596-1605, 2015
- 5) Green BN, Johnson CD, Adams A.: Writing narrative literature reviews for peer-reviewed journals: secrets of the trade. *Journal of Chiropractic Medicine*. 5: 101-117, 2006
- 6) Munn Z, Stern C, Aromataris E, Lockwood C, Jordan Z.: What kind of systematic review should I conduct? A proposed typology and guidance for systematic reviewers in the medical and health sciences. *BMC Med Res Methodol*. 18: 5, 2018.
- 7) Jahan N, Naveed S, Zeshan M, Tahir MA.: How to Conduct a Systematic Review: A Narrative Literature Review. *Cureus*. 8: e864, 2016
- 8) Slavin RE.: Best evidence synthesis: an intelligent alternative to meta-analysis. *J Clin Epidemiol*.; 48(1): 9-18, 1995
- 9) Hoffmann F, Allers K, Rombey T, Helbach J, Hoffmann A, Mathes T, et al.: Nearly 80 systematic reviews were published each day: Observational study on trends in epidemiology and reporting over the years 2000-2019. *Journal of Clinical Epidemiology*. 138: 1-11, 2021
- 10) Baethge C, Goldbeck-Wood S, Mertens S.: SANRA—a scale for the quality assessment of narrative review articles. *Research Integrity and Peer Review*. 4: 5, 2019
- 11) Hornby R, Falcone B, Cookson C.: Narrative Reviews and Consensus Processes – Combining the Literature with Expert Opinion and Real-World Experience Jul 30, 2019 | News and Trends, <https://www.ismpp-newsletter.com/2019/07/30/narrative-reviews-and-consensus-processes-combining-the-literature-with-expert-opinion-and-real-world-experience/>. (2025年1月23日検索)